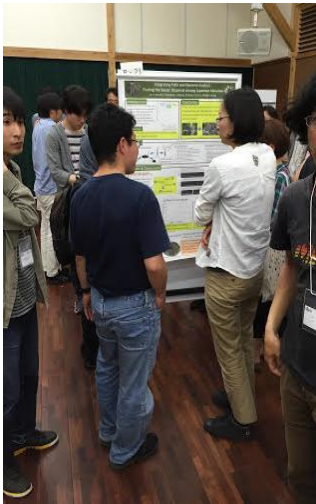


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 6 月 26 日	
所属部局・職	京都大学理学研究科 修士課程学生
氏名	檜森弘志

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)	
日本、京都	
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
ゲノム科学実習、ヤクシマザルの糞試料を用いた性判別と個体識別	
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)	
平成 27 年 6 月 1 日 ~ 平成 27 年 6 月 9 日 ( 9 日間)	
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
京都大学理学研究科、井上英治助教	
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>京都大学のゲノム科学実習で、ヤクシマザルのゲノム解析を行った。先立って行われたフィールド実習のサル班が持ち帰った糞試料から DNA を抽出、増幅し電気泳動による性判別とシーケンサを使ったマイクロサテライト分析を、その方法を学びながら行った。性判別では、個体情報の分かっている試料で正しい結果が出ることを確かめた上で、現地では性の分からなかった若い個体の性を判別できた。さらにマイクロサテライト領域をシーケンサにかけて分析することで全試料について個体識別することができ、群れの大部分の個体の糞を採取できていたことが分かった。実際に手を動かしながら教わることで、遺伝実験の方法の基礎を理解することができた。また、サルが初夏に食べるヤマモモの種子はサルの咀嚼によって一部破壊されることが糞の分析から分かっていたが、今回の遺伝子分析の結果と組み合わせ、糞試料から個体情報を引き出すことで性、年齢と破壊率の相関や個体差について調べることができた。サンプル数が少ないこともあり明確な傾向は見られなかったが、野外観察に遺伝子実験を取り入れることで、より効率よくデータを採ることができ、研究の可能性を広げることが分かった。実習の最後には国際セミナーでのポスター発表を行った。</p>	
	
写真：国際セミナーのポスターセッション	
<b>6. その他</b> (特記事項など)	